

派遣研究員

氏 名	鍋田 尚子
所 属	歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
派遣期間	2017年11月22日～2017年12月5日
派遣先	韓国 漢陽大学校 東アジア文化研究所
研究課題	韓国における竈神信仰 —ベトナム・中国・沖縄との比較研究—



韓国における竈神調査

鍋田 尚子

はじめに

竈神は日本では三宝荒神やカマ神、沖縄では火の神として祀られている。世界でも多くの国や地域で竈や台所の神として、また火と結びついて祀られている。竈や台所が置かれる場所もそれぞれに特徴があり意味を持つ。家族や生活において重要な神であり、また恐れられる存在でもある竈神を研究することは、人々の暮らしや文化を理解する上で重要な役割があると考えている。

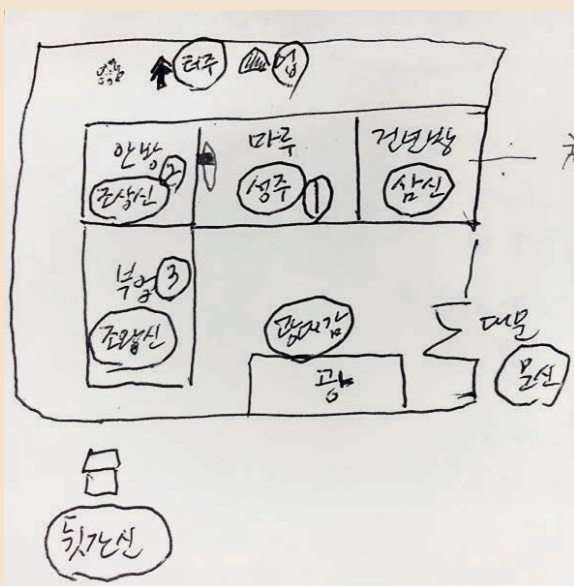
東アジアの国や地域は歴史的、文化的に中国の影響を

強く受けながらも独自の文化を創造してきた。ベトナムと沖縄の竈神信仰には、中国の影響として共通した面がある一方でそれぞれの独自の特徴が見られる。本研究では、韓国の竈王信仰について資料調査と聞き取り調査を行い、中国・ベトナム・沖縄の竈神との比較研究につなげることを目的とした。

Ⅰ 韓国の家庭信仰

竈王が祀られるのは家の台所、昔は竈が置かれていた場所である。韓国には竈神以外にも家庭で祀られる神がいる。収集した資料やソウルの民俗博物館の鄭然鶴先生によるレクチャー、中央大学校の任章赫先生からいただいた助言などに基づいて、家庭信仰について簡単に記したい。

図1は筆者のメモ帳に鄭先生が書いてくれたものであり、家庭内で祀る神とその列位が記されている。①はソングジュ（성주）神。日本語で書かれた資料には成主、成造または城主の漢字が当てられている。つまり家宅神のことであり、鄭先生によると家で最も重要な神だという。家の柱や壁に白い布を掛けて祀られる（写真1）。チューターのチョン・ヘリンさんは仁川出身で、仁川の家では柱を別に立ててソングジュを祀るという。また米を入れた壺も置かれるが、その米は1年に1度交換し、白い布は10年に1度交換する。毎年、ソングジュプリという祭祀が米の収穫後に行われる。アパートやマンションなどで暮らす家族もソングジュを祀っているが、現在ではどのような神が分からずに祀っている人たちもいるそうである。ソングジュについてはまた別の機会に報告した

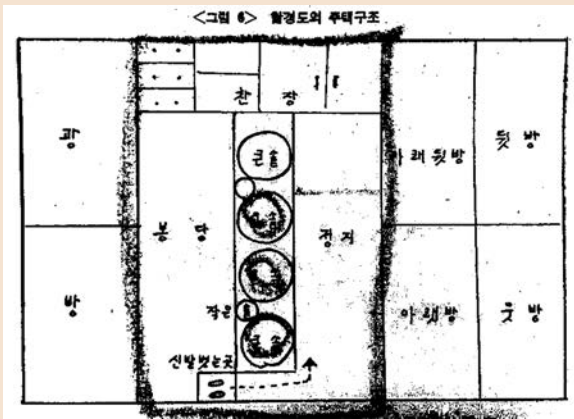


● 図1 家庭内で祀る神（図 鄭先生提供）





●写真1 ソンジュ神 (写真 鄭先生提供)



●図2 中央に置かれた竈
出典：『韓国民俗総合調査報告書』

いと思う。

中央大学の任先生は、家の神で1番大事な神であるソンジュ神は穀霊神であり、韓国の民間信仰の可能性があると述べている。韓国の家庭で最も重要な神が穀物の神でもあること、そのソンジュと竈王との関係については、まだわからないことも多く今後も調査を続けていきたい。

家の神の2番目の位置付けは、②祖先である。しかし、この祖先は直接につながる祖先ではなく漠然とした祖先で、祭壇も位牌もない。そして3番目が③チョアン(조왕)神、竈王である。竈王の役割は台所の神である。

II 竈王に関する資料収集

韓国の竈王に関する以下の論文3本を漢陽大学の東アジア文化研究所の李京僖先生から受け取った。①「三韓의 '臘日祭祀'와 부뚜막신앙」(三韓の臘日祭祀と竈信仰)、②「百濟의 舞樂 進會利古와 竈王信仰의 日本 傳來」、③「조왕의 성격과 전승양상」(竈王の特徴と伝承の様相)である。3本とも興味深いタイトルであるが、

今回は現在の竈王信仰を知るために関連のある③の資料を参考にしながら、資料収集を進めた。

「조왕의 성격과 전승양상」(竈王の特徴と伝承の様相)は、韓国の家庭信仰について各地方編が出されており、それらの資料を使用し地域や項目(祀られる場所や供物、ソンジュ神との関係など)ごとに整理したものである。この論文では実際の調査は行われていないため、竈王の実態については不明である。筆者は中央大学の任先生の研究室で原典の資料である家庭信仰の各地域編に目を通し、竈王について必要な箇所についてはコピーを取り資料の収集を行った。任先生や著者の최숙경氏によると、このような報告書や地方誌には竈王について記されているが、竈王を研究した論文などはほとんどないようである。

興味深い資料を任先生から提供していただいた。『韓国民俗総合調査報告書』の衣食住に関する部分である。図2で、「정지」と記された空間は台所である。このチョンジ(정지)は主に北方地域で用いられる言葉であり、図2では家の中央に竈が置かれている。竈の煙を利用した床暖房オンドルは、もともと北方地域で用いられたものであり、韓国全土に広まったのは15-6世紀であるという。「竈の機能」や竈が置かれる場所の変遷などは韓国の竈王の役割を考える上で重要であろう。また、ベトナムと韓国の比較についても大事な視点になる。

資料はその他にも民俗博物館の図書館で家庭信仰の資料や地方誌などから竈王に関する記述を収集し、また子ども向けの絵本を書店で購入した。

III 竈王に関する聞き取り調査

(1) ソウル

ソウルでは北の山の裏側にあるアンゴル(안골)村で聞き取りを行った。その村は同行してくれた仏教美術の研究者である池美玲さんが事前に調べてくれていた。彼女によると、今も祭祀や儀礼が残っている地域であり、1970年頃に村を守る神体はイチョウの木のある一角に移され、家の儀礼もその神体であるイチョウの木のもので行うらしい。その村の巫女である金さんに会うことができた。

金さんは慶尚道出身の77歳。20代を通して夢の中でお告げを受け続け、28歳の時に江原道で神を受け入れた。しかし巫覡の仕事をしなかったため、神から罰を受けたという。その後ソウルに来て、アンゴル村には35年前から住んでいる。金さんの話では、35年前に村に来た時から一般の家庭では竈王を祀る人はいなかったという。巫覡の人々のみが1日と15日に祀り、普段は水を供えるが、本当にいい日や特別な日は果物や野菜、お酒を供えるという。竈王を拝む様子を特別に見せてもら



った（写真2）。

同行してくれた池美玲さんの祖母は、竈王を毎日拝んでいたという。子どもの頃の記憶によると、毎日夜明けに竈の横に置かれた椀の中の水を新しく換えたあと竈神を拝んでいた。その間祖母は他の人と誰とも言葉を交わさず、幼かった美玲さんが話しかけても一切答えなかったという。引っ越しをしてガスコンロに変わったあとも祖母が存命中はコンロの横に椀を置いて水を換えて供えていた。美玲さんによると、椀の中の「水」が竈王の神体であったという。また、叩いた米を椀に入れてその中に蠟燭を立てていたこともあるが、いつそれを行っていたかは覚えていない。竈王を祀るのは1番年上の女性であるが、祖母が亡くなったあと、美玲さんのお母さんは竈王を祀ってはいない。

（2） 濟州島

ここでは聞き取りの報告の前に、少し濟州島の竈王に関連する特徴的な面について記したい。韓国の本土でムーダンと呼ばれる巫覡は濟州島ではシンバンと呼ばれ、竈王にも関わる。その1つに門前ポンプリ（本解）という門前神のいわれを解く神話がある。概略を説明すると、夫婦には7人の子どもがいたが、夫は出稼ぎに行きその先で妾を作る。妾は夫を探しに來た妻を殺して自分が妻になりかわり家に戻るが、末子がそれを見抜き妾は死ぬ。その末子が門前神として祀られる話であるが、死んだ妾は厠の神になり、夫は家の入り口にある柱木の神に、そして妻が竈王になるのである。また、竈王となる妻は妾によって池や川など水の中で殺される。ここから竈王と水の関係にも注目したい。門前ポンプリは竈王が中心の話ではないが、ベトナムの竈神の由来譚や中国の少数民族の昔話と比較ができる。

濟州島の暮らしを理解するために濟州民俗村で土俗信仰村のエリアを中心にみてきた。家の構造や村や家で多くの神が祀られていることが展示からわかる。それらの中で最も興味を引いたのは、濟州島の竈である。韓国本土の竈とは異なり、3つの石が置かれている（写真3）。また間取りもオンドルの場合は暖をとるという機能から主人の部屋の隣に置かれるが、濟州島では主人の部屋の反対側に台所が作られている。気候の違いや島に吹く風の影響などによるものであるが、竈王の祭祀にどのように違いがみられるかはこれから調査を続けたい。

聞き取りは3箇所で行った。モーターの経営者、みかん農家の夫婦、シンバンの女性である。まだテープ起こしのできていない部分が多くあるため、ここではモーターの経営者、金さんの話を中心に内容を簡単に記したい。金さんは現在64歳。結婚以前はカトリックの信者であり竈王などは祀っていなかった。結婚して姑が竈王



●写真2 金さんの家 竈王を祀る



●写真3 濟州民俗村の家に置かれた竈

を祀る様子を見ていて、悪いことが起きることもないから祀ることが悪いことではないと思え、それで家族が守られるならと思うようになったという。その後、姑に代わり自分が祀るようになり、毎日水を取り替え、蠟燭を灯して線香をあげている。時間は朝でも夜でもいい。毎日祀るからといってとても信心しているわけではないという。特別な時、心配事やお願い事がある時は、特に果物などの供物を用意して祀る。その時シンバンを呼ぶ場合もあるし自分たちだけでする場合もあり、また僧侶に来てもらう場合もある。また、シンバンを呼んで行うのは、立春のあとに家で行うクッ（巫俗儀礼）であり、その時は竈王だけでなく家の神々に対して儀礼を行う。立春のあとのクッについてシンバンの女性は、多い日には1日に17件の家を回りクッを行うと話している。現在でもまだ多くの家でシンバンを呼んで家の神を祀り、竈王に対してもシンバンと女性が供物を供え儀礼を行っているということがわかる。シンバンの話はまた別の機会に述べたい。





●写真4 東アジア文化研究所での研究発表

IV 韓国の竈王 ベトナム・中国・日本との比較から

韓国で行った調査の成果を漢陽大学の東アジア文化研究所で発表した。発表内容は、「ベトナムの竈神崇拝—東アジアとの比較研究—」である(写真4)。ここでは韓国の竈王についてベトナムや東アジアとの比較からその特徴をまとめてみたい。

今回の調査で韓国の竈王の2つの特徴が見られた。1つ目は家の神、ソングジュ神との関係である。ベトナム・キン族や中国・漢族、沖縄で祀られる竈神は台所の神で

あり、家族の保護をする最も重要な神である。しかし、韓国の場合は最も重要な神はソングジュ神とされ、竈王は台所の神として区別されている。

2つ目は、竈の側に置かれる水の入った椀である。竈王への供物であるという説と椀の中の水が神体であるという説があり、考えは二分している。ベトナムの場合、神体は昔は竈(土製支脚)、現在は神像や神牌が祀られている。沖縄では現在、香炉がその役割をしている。韓国で火を扱う竈の神の神体が水であるということ、また供物か神体かという問題は、他の国や地区では見聞きしたことがなく、比較研究として韓国の竈王を理解するために非常に重要であり興味深い。

おわりに

今回の韓国調査は、竈王のことをほんの少し触れてみたぐらいのものである。しかし韓国の竈王の面白さを強く感じ、韓国の竈王を知るとは東アジアの他の地域との比較研究に非常に重要な位置を占めることを確信した。これからさらに韓国の竈王について研究をしていきたいと思う。

今回このような調査ができたのは、漢陽大学校の東アジア文化研究所の方々をはじめ多くの人々の親切に助けられたおかげである。改めてお礼を申し上げます。

Investigation on the Tutelary Deity of the Kitchen Furnace in Korea

Graduate School of History and Folklore Studies Doctoral Program NABETA Naoko

Introduction

The tutelary deity of the kitchen furnace is known as Sambo-kojin (三宝荒神) or Kama-gami (カマ神) in Japan and the fire god in Okinawa. Many countries and regions also worship a god of the hearth that is associated with the god of fire. The location of the furnace and kitchen in the house also each have distinctive characteristics and special meanings in each culture. The deity of the furnace is important to the family and home, and is much feared, and research on the god is important in understanding people's lives and cultures.

The countries and regions of East Asia were strongly influenced both historically and culturally by China but developed unique cultures. The deities of the furnace beliefs of Vietnam and Okinawa have common attributes

derived from Chinese influences, but also distinctive characteristics. I examined materials on the deity of the furnace beliefs of Korea and conducted interview surveys, to compare with the deity of the furnace in China, Vietnam and Okinawa.

I Korean household gods

The tutelary deity of the kitchen furnace Jowang (竈王) was worshiped in the kitchen, where the stove was traditionally located. In Korea, other household gods are also worshiped. Here I will provide an overview of household beliefs based on material I have collected, lectures by Mr. Jung Yon-hak (鄭然鶴) of the National Folk Museum of Korea in Seoul, and guidance from Professor Im Janghyuk (任章赫) of Chung-ang University.



Photo 1 shows a diagram that Mr. Jung wrote in my notebook (photo 1), in which the various household gods and their ranking are shown. The god Seongju (성주) is ①, written as 成主, 成造 or 城主 in Japanese literature. This god is the household guardian deity, and according to Mr. Jung it is the most important god in the household. People worship the god by hanging white cloths from a pillar or wall in the house (photo 2). The tutor Jeong Hae-rin (정해린), who is from Incheon, says households there worship Seongju by erecting a separate pillar for that purpose. A jar containing rice is also placed as an offering and the rice is replaced once a year, while the white cloth is replaced every 10 years. An annual festival called Songjupuri is held after the rice harvest. Families who live in apartments and condominiums celebrate the festival but many people today do not seem to know much about the nature of the god they worship. I would like to discuss the god Seongju on another occasion.

Professor Im says Seongju, the most important god in the household, is the god of grain and may have its origins in Korean folk beliefs. The relationship between Seongju and the Jowang is still not fully understood and a subject I intend to continue investigating.

Incidentally, the second-ranked god is the ancestor god. However, this god is not a direct ancestor of the family but more an abstract presence, lacking either an altar or memorial tablet. The third-ranked is Jowang, the god of the hearth and kitchen.

II Collection of materials on the stove god

I received the following three papers concerning Jowang by Professor 李京僖 (이경희 이·키ョンヒ) of the Hanyang University Institute for East Asian Cultures. Their titles are ① 「三韓의 '臘日祭祀'와 부뚜막신앙」 (The “hunting day” (臘日) festival of the Samhan and the Jowang belief), ② 「百濟의 舞樂 進會利古와 竈王信仰의 日本 傳來」, and ③ 「조왕의 성격과 전승양상」 (“The characteristic and the appearance of transmission in Jowang (kitchen god) worshipping custom”). All three titles are of much interest but in collecting material for this study I used ③ as a reference since it was most closely concerned with contemporary Jowang worship practices.

The paper is based on a book on Korean household religions consisting of multiple volumes each focusing on a certain region, organized by area and content (such as placement of altar, types of offerings, and their relationship to Seongju). Since the paper does not involve field-

work, it does not cover practices of Jowang worship. I examined the original book on Korean household religions in Professor Im's office to collect material on Jowang, making copies of passages containing relevant information. According to Professor Im and the paper's author Choi Suk Kyoung 최숙경, although there are mentions of Jowang in various local reports and journals it seems that papers on Jowang are very scarce.

Professor Im provided me with material of great interest — passages concerning food, clothing and housing in the 『韓國民俗綜合調査報告書』 (“Report on the general investigation of Korean folk culture”). In Fig. 1, the area labeled “*jeongchi*” 정지 is the kitchen. The word *jeongi* is used mainly in the northern regions, and in the figure, the hearth is at the center of the house. The traditional underfloor heating system *ondol*, utilizing stove smoke, originated in the regions and its use is believed to have spread across Korea in the 15th to 16th centuries. The stove's function and factors such as temporal changes in its location are important considerations in the study of Jowang. Another important perspective is provided by comparisons between Vietnam and Korea.

I also collected descriptions of Jowang from local journals and documents on household beliefs in the library of the Folk Museum, and purchased children's picture books.

III Investigation of Jowang through interview surveys

(1) Seoul

I conducted interviews at 안콜 (안골) 村, located on the far side of a mountain north of Seoul. Buddhist art scholar Ji Mi-ryong (池美玲) accompanied me and conducted a preliminary investigation of the village before my survey. She found that the community still performs traditional rituals and ceremonies; in 1970 the sacred body of the village guardian god was transferred to a spot near a ginkgo tree, and household rituals now take place at the foot of the tree housing the god. I was able to meet Ms. Kim, who was a shaman of the village.

Ms. Kim was born in Gyeongsang Province and is 77 years old. She received spiritual messages in her dreams throughout her twenties and when she was 28 she underwent initiation as a shaman at Kangwon-do. However, she said she was punished by the gods for neglecting her calling as a shaman. Subsequently she moved to Seoul and has been living at 안콜村 for 35 years. Accord-



ing to Ms. Kim, Jowang worship has not been a custom in any of the ordinary households in the village since she arrived. Only the shamans paid reverence to the god on the 1st and 15th of every month, and she said that although usually the offering was water, on very auspicious or otherwise special days there were also offerings of fruits, vegetables and wine. I was given special permission to view a scene of a Jowang worship ritual (photo 3).

My companion in the investigation, Ji Mi-ryong, said her grandmother worshiped Jowang every day. She remembers that when she was a child, her grandmother changed the water in a bowl placed next to the stove every day at dawn, after which she prayed to Jowang, and during this ritual she talked to no one, and did not reply at all when the young Mi-ryong spoke to her. Even after they moved to a different house with a gas stove, her grandmother continued to offer water in a bowl next to the stove. Mi-ryong says the water in the bowl embodied the spirit of the god. Also, they sometimes put pounded rice in a bowl and lit a candle in the center, but she does not remember the timing of those occasions. Jowang worship was the job of the eldest female in the house but after Mi-ryong's grandmother died, her mother ended the practice.

(2) Jeju Island

First, I will describe some characteristics of Jowang worship on Jeju Island before reporting the results of my interviews. The spirit mediums called *mudan* on mainland Korea are called *simbang* on Jeju Island and are associated with the god Jowang. One such example is the myth *munjeonponpuri* (門前ポンプリ), about the origins of the gate god (Munshin). A brief account of the myth is as follows: a man and wife had seven children, but the husband left home to work and took a mistress. The mistress killed the wife, who had come to look for her husband, and assumed her identity. But when she went to the family home, the youngest child saw through the mistress's disguise and killed her. The child came to be worshiped as the gate god, the mistress became the goddess of the privy, the husband the god of the pillar at the entrance to the house, and the wife was worshiped as Jowang. Incidentally, the mistress killed the wife by drowning her in a lake or river. This is of interest considering the stove god's connection with water. Jowang is not the main character in *munjeonponpuri* but comparisons can

be drawn with the Vietnamese myth on the origins of the deity of the furnace and with the folk tales of ethnic minorities in China.

I visited Jeju Folk Village, where I concentrated on viewing the Shamanism Village area to further my understanding of the lifestyle of the people on the island. From the exhibits I was able to observe the structure of the houses and learned that many gods were revered in the village and at homes. Here the exhibit of the most interest was about the structure of the cooking range used on the island. It differs from those of the Korean mainland in that three stones are used to support pots (photo 4). There are also differences in the layout of the houses; in houses with an *ondol*, the kitchen is next to the room of the master of the house, whereas on Jeju, the kitchen is on the opposite side of the house. This is due to differences in climate and wind conditions and I will continue to investigate distinctions in Jowang worship between the two regions.

I conducted interviews in three locations. The subjects were the proprietor of a motel, a husband and wife who grew mandarin oranges, and a *simbang* woman. Since the transcription process from the recordings is not yet complete, here I will provide a simple overview mainly based on the interview with motel proprietor Mrs. Kim. She is 64 years old. Before her marriage she was a Catholic and therefore did not worship gods such as Jowang. After her marriage, she watched her mother-in-law performing the Jowang worship ritual and came to believe that it was not a bad custom and worth doing if the ritual helped protect the family. Later, she began to conduct the ritual herself on behalf of her mother-in-law, changing the water every day and lighting a candle to burn incense sticks. The ritual could be carried out either in the morning or at night. She said that although she performs the ritual daily she is not a devout believer in the god. On special occasions and when she is worried about something or has a wish, she makes offerings, such as those of fruits. On such occasions people may call a *simbang* or carry out the ceremony themselves, and sometimes ask a Buddhist monk to come. A *simbang* is called to conduct the *kut* ritual after the first day of spring, not only to worship Jowang but for all of the household gods. The *simbang* woman said she visits as many as 17 homes a day to perform the *kut* following the first day of spring. Even today, many homes that call for *simbang* to come pray to the household gods, and both the *simbang* and women make



offerings and conduct rituals to worship Jowang. I would like to discuss the *timbang* at a future opportunity.

IV Korea's Jowang and comparisons to the deities of the furnace of Vietnam, China and Japan

I presented the results of my investigation in Korea at the Hanyang University Institute for East Asian Cultures. My presentation was titled “Worship of the tutelary deity of the kitchen furnace of Vietnam—a comparative study with respect to (the beliefs of) East Asia” (photo 5). Here I will sum up the distinctive qualities of the Korean Jowang through comparisons to the gods of Vietnam and East Asia.

This investigation revealed two unique attributes of Jowang. One is the relationship with the household guardian god Seongju. The deity of the furnace of the Kinh people of Vietnam, the Han people of China, and Okinawa are the gods of the kitchen and the most important household gods, as they protect the family. However, in Korea the most important god is Seongju, a presence set apart from the kitchen god Jowang.

Another aspect concerns the bowl of water placed next to the stove. There are two theories concerning its significance, one being that it is an offering to Jowang, the other that the water is the embodiment of the god. In Viet-

nam, the deity of the furnace was traditionally embodied in the stove (three bricks) but today statues and memorial tablets are worshiped as containing the god's spirit, while in Okinawa, incense burners fulfill this role. The Korean belief that the deity of the furnace is embodied in water despite its close association with fire, and the conflicting opinions concerning the water in the bowl, whether it is simply an offering or the embodiment of the god itself, are unique issues unknown in other countries or regions, and extremely important and interesting aspects in gaining an understanding of Korea's Jowang from the viewpoint of comparative research.

Conclusion

This investigation in Korea has only touched the surface of the study of Jowang beliefs. However, I was strongly attracted to this god as a research subject of great interest and am convinced that learning about it holds a very important position in carrying out comparative studies with other regions of East Asia. I intend to continue my research on Jowang, the Korean tutelary deity of the kitchen furnace.

My study was made possible by the kind support of many people including the staff at the Hanyang University Institute for East Asian Cultures. I would like to thank them again for their generous assistance.

